石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事 業 報 告 書

第 16 巻

平成 30 年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻　頭　言

本学は平成 30 年度で開学丸 20 年が経過しました。それと同時にこの地域ケア総合センターの活動も丸 20 年が経過することになります。手探りで始まったこのセンターの活動は、さまざまな形で結実し、石川県内に定着した感があります。そして近年はまた地域の行政や団体と新たな関係を作って発展し、センターは今後も継続的に地域とともに歩む大学の顔になって進んでゆきます。

近年の活動の主なものは、大学の地元であるかほく市との連携包括協定に裏打ちされた多岐にわたる活動、大学以北の自治体における活動、さらには大学コンソーシアム石川や能登キャンパス協議会の一員としての他の大学と共同した活動があります。本学の教員数と学生数は小規模なものでありますが、関係自治体や地域住民の皆様の温かいご支援により、何とか頑張れていると感じています。

また、新たな 10 年を迎えるこの時点で、今後に向けては、企業と連携した活動にも挑戦したいと考えています。これまでもかほく市発の健康弁当開発との関わりなど、多少の実績を積んで来ました。これからは様々な機会をとらえて企業の方々とも話しあうことを心がけ、どのような要望が潜在しているのか、本学に何ができるのか、開拓してゆきたいと思っています。これまでの 20 年間に輩出した学生の資質に備わっているこのセンターの活動を通した地域や生活に対する理解力に、企業との連携による新たな側面が加わることを期待しているところです。

さて、平成 30 年度のこのセンターの活動については、この冊子に記録されています。多数の教員が参加するイオンモールウォーキング事業、教員の個別の専門性による子育て支援、保健室登校児の支援、限界集落住民支援、特定地域の健康づくり支援等、病院の看護研究支援など様々あります。直接的に学生が参加する事業に関連しては、大学全体の方針として「グローカル人材育成アクションプラン 2018」を定め、他国と比較する視点を持って大学の地元を知る重要性をアピールしました。これは、学生が海外に出かける研修と抱き合わせのプランといえますが、同時にこのセンターで毎年取り組んでいる北陸 JICA と連携したパラグアイの日系社会やアジア・コーカサス地方の国々から来日する研修生との交流も大切な機会となっています。

詳しくはこの報告書で平成 30 年度にどのような活動があったかをご覧いただき、このセンターの活動に対する要望や忌憚のないご意見をうかがえれば幸甚に存じます。

石川県公立大学法人　石川県立看護大学
学長　石垣和子

地域ケア総合センター「事業報告書（第 16 巻）」発刊に寄せて

地域ケア総合センターのさまざまな事業に日頃からご協力いただきありがとうございます。

この度、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの事業報告書（第 16 巻）を発刊する運びになりました。地域の皆さまにはご一読いただき忌憚のないご意見やご要望をいただければと思います。

さて平成 30 年度も地域ケア総合センターでは従来どおり「人材育成」、「地域連携・貢献」、「国際貢献」の３本柱でさまざまな事業を展開してまいりました。

専門職研修としては「能登北部医療圏の在宅療養移行支援を考えるーこの町で生ききりたいをかなえるためにー」と題した事例検討会と講演会を行いました。能登北部の看護部長さんをはじめ多くの医療職の皆さんのご協力を得て活発なやり取りができたと喜んでいます。

地域連携・貢献事業では、かほく市と連携して新たに発達障害に関する相談事業を始めることができました。発達障害に関する悩みをお持ちの方に少しでも支えになることができたらと思っています。

国際貢献事業のうち、JICA 青年研修ではカンボジアから 14 名の研修生を受け入れました。本学で地域保健医療に関する基礎的な知識について講義を受けた後、石川県庁、一次医療、二次医療、三次医療の施設、保健所、市町保健センター、予防医学協会、かかりつけ薬局等の視察を通し、地域保健医療について多くを学んでいただきました。

これ以外にもさまざまな事業を開催し、多くの皆さまに足を運んでいただけたことを本当にうれしく思います。各事業の詳細については各報告をご覧いただければと思います。

地域ケア総合センターではより多くの大学教員が臨床現場や関係機関、自治体のニーズに応えることができるように、研究テーマとのマッチングを進めていきたいと考えています。

今後とも地域ケア総合センターの各事業にご理解とご協力をお願い申し上げます。

地域ケア総合センター長　武山雅志

目　　次

(ページ)

1　人材育成事業
1-1　専門職研修
1-1-1　能登北部医療圏の在宅療養移行支援を考える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1-1-2　能登の在宅看護現場で活かせるフィジカルアセスメント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1-2　本学教員主催の研究会・事例検討会
1-2-1　ジェネラリストのための事例検討会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
1-2-2　ペリネイタル･グリーフケア検討会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
1-2-3　子どもと家族への支援に関する勉強会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
1-2-4　医療現場での対人関係を考えよう ～他者との違いを知る～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
1-2-5　地域包括ケア時代「新しい地域包括ケア時代のまちづくり」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
1-2-6　新任保健師スキルアップ研修会　・・・ 9
1-3　相談サービス事業
1-3-1　各種研修会等への講師派遣事業　・・ 10
1-3-2　病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

2　地域連携・貢献事業
2-1　地域連携事業
2-1-1　来人喜人（きときと）健康づくり支援事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
2-1-2　「ワクワク健康サークル」活動　・・・16
2-1-3　棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
2-1-4　モールウォーキング事業　・・ 18
2-1-5　かほく市子育て支援学生ボランティア事業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
2-1-6　災害につよい街づくり事業・・ 20
2-1-7　農福連携いしかわ型ヒツジ飼育体験教室　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
2-2　生涯学習講座
2-2-1　どろっぷ・いん・さろん　・・ 24
2-2-2　あかちゃんをお空にみ送った方の自助グループに対するサポート活動・・・・・・・・ 26
2-2-3　ヘッドマウントディスプレイを使用した「認知症疑似体験教室」・・・・・・・・・・・・ 28
2-2-4　オルゴール療法で体も心もリフレッシュ ～がん体験者同士で語ろう～・・・・・・・ 30
2-3　ワンストップサービス事業　・・ 31

3　国際貢献事業
3-1　JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース・・・・・・・・・・ 33
3-2　JICA 青年研修「地域保健医療実施管理」コース ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

4　その他
4-1　かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

1　人材育成事業

1-1 専門職研修

１－１－１　能登北部医療圏の在宅療養移行支援を考える

１．事業の目的

能登北部の医療施設の方々が抱える在宅療養移行支援の課題を出し合い、先駆的に取り組んでいる講師から助言によって、少しでも解決の糸口が見えるようにすることを目的とする。

２．実施状況

日　時：平成 30 年 6 月 7 日（木）　15:00～19:30

場　所：キャッスル真名井（穴水）

総合司会：石川倫子（石川県立看護大学　附属看護キャリア支援センター　准教授）

第１部　多職種による事例検討会（15：00～17：30）

『地域住民がこの町で療養していくための在宅療養移行支援』

講師：宇都宮宏子（在宅ケア移行支援研究所）

事例提供：珠洲市総合病院、公立宇出津総合病院、公立穴水総合病院、輪島市立輪島病院

参加者：36 名

第 2 部　講演会（18:00～19:30）

『この町で生ききりたいをかなえるために　～在宅・地域協働で取り組む退院支援～』

講師：宇都宮宏子（在宅ケア移行支援研究所）

参加者：118 名

３．実施内容

第１部　多職種による事例検討会では、公立宇出津総合病院、公立穴水総合病院、輪島市立輪島病院、珠洲市総合病院の順に、1 病院 30 分ずつ事例検討を行った。講師の質問に、参加者は患者の願いに近づくケアが考えられるようになり、最後は 4 つの病院の看護師、ケアマネージャー、ソーシャルワーカーなどが「この町でこの患者さんの願いをみんなでかなえたい」という気持ちが一つになって、ディスカッションが繰り広げられた。

第 2 部　講演会では、能登北部の病院、居宅介護支援センター、訪問看護ステーション、地域包括支援センター、老人保健施設などから看護師、保健師、ケアマネージャー、相談員などが参加した。この地域に住む医療職・介護職等だからこそ、この町で最期まで生ききりたいをかなえるためにどう支援していけばいいのか、「なんとかしたい」という思いが参加者から伝わってきた。講師から何度も繰り返される「患者さんはどう生きたいのか」という問いに、あらたに「患者の意向に添う看護」を行っていくという参加者の意気込みを感じた。

４．評価と今後の課題

事例検討および講演をとおして、この町で生きていくためにどう支援をしていくかを一人一人が考えるきっかけをつくることができたと考える。今後はこの町で実現・継続可能な在宅療養移行支援を参加者一人一人が創りだす場を提供していく。

１－１－２　能登の在宅看護現場で活かせるフィジカルアセスメント
―訪問看護師・介護老人保健施設等看護職向けー

１．事業の目的

１）訪問看護・介護老人保健施設現場で活かせるフィジカルアセスメントの知識と技術を習得する

２）訪問看護・介護老人保健施設現場での「高度看護実践看護師：NP(ナース・プラクティショナー)」の実践知を学ぶ

２．実施状況

・日時：平成 30 年 9 月 15 日（土）10:30～16:00
・場所：能登空港 41 会議室
・講師：医療法人　別府玄々堂　上人病院　　光根　美保先生（高度実践看護師：NP）
・ファシリテーター：石川県立看護大学　　林一　美、山﨑智可

３．実施内容

１）実施内容：フィジカルアセスメントに関する講義と演習

２）参加者：23 名（訪問看護 12 名、介護老人保健施設 5 名、その他 6 名）であった。

３）参加者訪問（施設）看護歴：1 年未満 7 名、1～5 年以下 4 名、6～10 年以下 3 名、11～15 年以下 1 名、16 年以上 8 名であった。

４）演習内容：よくわかった 11 名（48%）、わかった 6 名（26%）、おおよそわかった 6 名（26%）
講義の満足：とても良かった 13 名（57%）、良かった 7 名（30%）、おおよそ良かった 2 名（9%）、不明 1 名

５）今後の看護活動の活用：参考になった 21 名（95%）、どちらでもない 1 名

４．評価と今後の課題

本年度事業は、地域ケア総合センターの人材育成事業「能登枠」に対して、「能登の在宅看護現場で活かせるフィジカルアセスメント―訪問看護師・介護老人保健施設等看護職向けー」を企画し、会場を能登空港でおこなった。受講生の対象施設を従来の「訪問看護事業所」だけでなく「介護老人保健施設」にも拡大した。受講生のアンケート結果から、講義内容理解や満足度はほぼ良かったと判断できる。

能登空港で開催したことについては、「能登地区での開催はありがたい」「今後も能登で研修会を開いてほしい」という受講生からの感想があった。会場準備について、事前訪問して設備機材などを確認した。しかし当日は土曜日で空港職員が不在であり、不慣れな会場での機材トラブルの対応等に手間取った。今後、能登地区開催時の会場は検討をする必要がある。

１－２ 本学教員主催の研究会・事例検討会

１－２－１　ジェネラリストのための事例検討

１．事業の目的

急性期から長期療養介護等において、患者の早期の在宅復帰と地域での暮らしの継続を目指し、専門領域を超えたジェネラル・ナースの看護実践力の向上を支援する。

２．実施状況

第１回

日時：平成 30 年 7 月 22 日（日）13:30～16:00
講師：中田　弘子（石川県立看護大学）他
場所：石川県立看護大学　地域ケア研修センター
参加者：37 名
事例提供者：病棟看護管理者
事例検討の概要：壮年期の男性。遺伝的疾患、消化管がん、運動器障害、重症感染症等の合併症の治療により入院が長期化したケース。在宅での症状コントロールと後期期高齢期の母親との 2 人暮らしとなる自宅への退院に向け、患者自身が「やっていける」という目標を設定ができるよう、多職種との連携により退院支援に繋げた実践過程を振り返る。

第 2 回

日時：平成 30 年 12 月 1 日（土）13:30～16:00
講師：川島　和代（石川県立看護大学）他
場所：石川県立看護大学　地域ケア研修センター
参加者：31 名
事例提供者：卒後 3 年目病棟看護師
事例検討の概要：後期高齢期男性。肺がんでターミナル期。対象の身体的なアセスメントとともに最期の生活の場をめぐる本人と家族の意思決定支援の実践過程を振り返る。

３．実施内容

事例提供者へは、事例提供の要望時から事例検討のための教材化を支援した。2 回の事例検討の参加者総数は 68 名であった。事例検討後の参加者アンケートの結果は、ほとんどの参加者が「満足」または「やや満足」と回答し、「事例検討が今後の看護実践や教育に活かせる」との回答は 9 割であった。参加動機は、「自己の実践力向上のため」が最も多く、次いで「職場の上司や同僚に勧められて」、「拠り所となる看護の考え方を学びたいと思って」の順であった。理解できた内容に関する自由回答では、「問題の多重構造を俯瞰してみることの必要性」、「細胞レベルと対象の全体性の両方を視る能力が必要」、「病棟での困難事例に応用したい」等であった。

４．評価と今後の課題

次年度も事例検討を継続するが、今後はチューターとなる人材の育成が課題である。

１－２－２　ペリネイタル・グリーフケア検討会

１．事業の目的

グリーフケアの実践を学び、地域連携の構築をはかることによって、ペリネイタル・グリーフケアの充実をはかる。

２．実施状況

第 19 回　日時:平成 30 年 7 月 22 日(土)13:30～16:00　場所:石川県立中央病院　会議室
テーマ　「臨床心理士からみた周産期のグリーフケア」
講師　　立命館大学大学院人間科学研究科　嘱託講師　管生聖子氏（臨床心理士）
スケジュール　前半(90 分)　講演
　　後半(30 分)　グループでの話し合い
　　(30 分)　講師との交流タイム
　　次回お知らせ　アンケート記入
参加者　36 名

第 20 回　日時:平成 31 年 2 月 17 日(日)13:30～16:00　場所: 石川県立中央病院　会議室
テーマ　「グリーフケアに取り組む自分自身を見つめて、ケアしよう」
講師　　ハートハグズ代表　一般社団法人日本グリーフ専門士協会認定講師（グリーフ専門士）
　　菅朱弥（すがあけみ）氏
スケジュール　導入　アイスブレイク
　　講演　ワークをはさみながら進行
　　グリーフとは、あなたのグリーフの状態
　　グリーフを抱えた方との接し方、グリーフとモーニング
　　喪失悲嘆のプロセス、自分を知る、受け入れる、守る
　　次回のお知らせ　アンケート記入
参加者　21 名

３．実施内容

第 19 回

講師の管生氏は大阪大学大学院で臨床心理学を専攻し、博士号を取得され、在学中は、研究する一方で保健所、病院、学校等で臨床心理士としてカウンセリング等の心理相談に携わっておられる方である。現在は大阪大学医学部附属病院胎児診断治療センター(CFDT)で心理的サポートを実施されている。前半はそれらのご経験の中から、胎児を喪失した対象に対しての具体的サポート方法、関わる姿勢、看護職との連携について実際のケースに基づいてお話していただいた。後半は講演後休憩をはさみ、グループ毎に管生氏の実際のケースの中から医療者としての関わりはどうだったかのだろうかと問題提議をいただいた内容について、各施設の情報交換と講演をお聞きしての質問、感想を含めて話しあっていただいた。その後、管生氏には、各グループからでた質問等に答えて頂き、交流を深めた。

第 20 回

まず、最初に導入として、隣の席の人とアイスブレイク後、グリーフとは何かという原点にもどり、グリーフとは死別だけではない広義のグリーフがあることを学んだ。その後、ワークを通して、自分のグリーフの状態を見つめ、敬聴、敬語といったグリーフを抱えた人との接し方を実践しつつ、お互いの話を聞きあった。次に、グリーフとモーニングの違いから安心して悲しみや

つらさを語ることのできる場の必要性と日本グリーフ専門士協会提唱の喪失による悲嘆のプロセスを学んだ。自分を知る・受け入れるワークとしては、日々、自分のマイナス面に目が行きがちであるが、あえて自分の出来ていること、成し遂げてきたことを書きだし、グループでシェアしつつ、自分をいたわり、自分を許す体験をし、不完全である勇気をもつことの大切さも学んだ。最後にプロフェッショナルグリーフということがあることを知り、自分を守るために自分の好きなもの等感情を切り替えるものを作っておくこと、語り合える場を作ること、時には自分をハグすることの大切さのメッセージをいただき、会は終了した。

４．評価と今後の課題

今年度の企画はグリーフケアの視野を広げることを目的に他の分野でグリーフケアに関わっておられる方の話を企画した。7 月は臨床心理士の方、2 月はグリーフ専門士の方とし、ケアする側のセルフケアに着目した。

第 19 回では参加者全員が今後に活かせる内容であると回答し、感想としては、「普段あまり関わりがない、なかなか聞けない臨床心理士からの話を聞けて、カウンセリング技術の参考になった」「事例を通して話してくださったので、わかりやすく、どのようにグリーフケアに入っていったらよいのかわかった」「グループで話し合うことで、病院それぞれのグリーフケアの内容を知ることができた」等あげられており、今後のケアに活かせるとても有意義な会になっていた。

第 20 回では「改めて学ぶ機会となった。自分自身を振り返ることができた。」「自分自身を知ることで他の人に対して気持ちを向けられるのだと思った。」「自分自身を見つめなおすことができ、気持ちが楽になった。」等あげられており、「今後、グリーフケアに関わるときに活かせる」や「他のスタッフに伝えたい」という表明もあり、この会も有意義なものであったと考える。

来年度の企画でも医療者・貴重な体験者の話両方を聴きつつ、体験者との交流、施設間の交流にもつながるように企画していきたいと考える。ちなみに来年度は第 13 回東アジアグリーフの集いが 11 月に金沢で開催されるため、グリーフケア検討会とコラボ企画とし、多くのグリーフケアに関わる人々と交流できればと考えている。

１－２－３　子どもと家族への支援に関する勉強会（子育て・親子関係・虐待予防）

１．事業の目的

対応が難しい事例等の支援を共有し、意見交換することや、新しい支援方法等の理解を深めることを通して、参加者が新たな知識・視点・考え方を獲得し、それぞれの仕事に活かすことができることを目的として、本事業を実施している。

２．実施状況

平成 30 年度は 10 月～12 月にかけて 4 回実施した。事例提供者は小児看護専門看護師 3 名、本学大学院修了生 1 名であった。

子どもと家族への支援に関わっている看護師、助産師、本学大学院修了生、大学院生、母性・小児看護学教員が参加して事例検討を行った。

３．実施内容

平成 30 年度の実施の概要は以下の通りである。

第 1 回　10 月 4 日（木）18:30～20:00　事例提供者：小児看護専門看護師　松井弘美氏
テーマ：3 世代続く虐待の世代間伝達の中で養育された思春期の児へのケア
参加者全 13 名

第 2 回　11 月 9 日（金）18:30～20:00　事例提供者：小児看護専門看護師　高橋久子氏
テーマ：長期入院により家族分離した被虐待児の支援　　参加者全 8 名

第 3 回　11 月 27 日（火）18:30～20:00　事例提供者：本学大学院修了者　長村純子氏
テーマ：中途障害児と家族への在宅支援　　参加者全 7 名

第 4 回　12 月 8 日（土）10：30～12：00　事例提供者：小児看護専門看護師　羽場美穂氏
テーマ：重症アトピー性皮膚炎　母親のステロイド拒否症例への対応
参加者全 10 名

7 名～13 名の参加者で各事例について情報共有し看護実践、支援について深く考える機会となった。子どもと家族への支援の具体策や他職種との連携等、事例に応じて多職種で子どもと家族を支える方略について意見交換でき、個々の知見を広げることにもつながっている。

４．評価と今後の課題

施設や職種を越えた交流や検討の機会があることで、各自の支援に活かせるという感想を得た。

参加者のニーズを把握しながら、事例検討と専門職の講義併用も検討し、子どもと家族への看護や子育て支援・虐待予防にかかわる支援者のスキルアップに貢献していく。

１－２－４　医療現場での対人関係を考えよう　～他者との違いを知る～

1. 趣旨

現代社会では、親子関係や友人関係が、SNS や携帯などといった便利な伝達方法の中で当たり前に過ぎている日常の中で、看護師が医師や患者・家族の関わりの中で、他者の成長のためと思えば思うほど、その関わりは難しいものになっている。しかし、どの時代においても、親が子を思い、教師が子供の成長を願い関わっていることには違いがない。そして、その関係性の中で、互いに人間としての成長がある。今回取り上げた「ケアの本質」は、哲学・心理学・医療・教育に関連する分野の書物のようであるが、本書には、看護実践の中で大切な「他者への専心」が描かれている。本書の序から各章を参加者と読み進めながら、「ひとりの人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現を助けること」について対話し、理解を深めていきたいと思った。

3. 実施状況

会場;石川県立看護大学　地域ケア総合センター研修室

参加者数；

第１回；平成 30 年 6 月 17 日（日）（10 時～12 時）　参加者数（講師含む）；13 名

第２回；平成 30 年 7 月 29 日（日）（10 時～12 時）　参加者数（講師含む）；15 名

第３回；平成 30 年 7 月 29 日（日）（13 時～15 時）　参加者数（講師含む）；16 名

4. 事例検討会の成果

今年度、はじめて本企画を実施した。「ケアの本質」ミルトン・メイヤロフ著（ゆるみ出版）を題材に、序章～第２章までを参加者で読み進め、本書に書かれている内容について、どう解釈できるか、また、それぞれの臨床現場の体験の中で、どういう関わりと一致するかについて、意見交換を行った。

参加者は、精神看護領域、がん看護領域（緩和ケアを含む）、助産領域、老年看護領域のかた方であり、現場での対人関係に関心のある人、本書に関心のある人などが参加され、活発な意見交換が行われた。

また、第２回と第３回では、日本 IPR 研究会の運営委員の２名の先生にも、コメンテーターとして参加していただき、事例の幅が広がり、参加者の理解が深まった。

参加者の中には、すでに、10 年～20 年前からこの本を購入していたものもおり、「本のタイトルには関心があり購入したが、難解な本で、ひとりで読み進めるには難しかった。今回、皆さんで詳しく解釈できる機会を得ることができて、よかった」「日々の実践の中で、患者だけでなく、同僚、そして課程での人間関係でも活かしていきたい」などの意見が聞かれ、今回の企画が今後の参加者の実践活動にとって活かせるのではないかと思う。

今後も、本企画を進めていきたい。

１－２－５　新しい地域包括ケア時代のまちづくり

１．事業の目的

地域包括ケアシステムの構築に向け、保健・医療・福祉のそれぞれの枠を超えた地域づくりを意欲的、先進的に行っている講師を招き、新しい地域包括ケア時代におけるまちづくりを模索することを目的とする。

２．実施状況

日　時：平成 30 年 9 月 21 日（金）　18:30～20:30

場　所：ガーデンホテル金沢

形　式：ラウンドテーブル

参加費：2,000 円（食事、飲み物込み）

講　師：坂本清美氏（前輪島市子育て支援センター、現輪島市立河原田保育所）

大田章子氏（社会医療法人祥和会 脳神経センター大田記念病院　社会福祉法人祥和会五本松の家）

角地孝洋氏（小松市役所長寿介護課、石川県立看護大学大学院卒）

参加者：22 名

３．実施内容

参加者は、地域包括支援センター職員、市町の保健師、病院保健師、訪問看護師、認知症看護認定看護師教育課程受講生、大学教員、院生、学生であった。

角地先生からは専門職や地域住民とともに小松市で取り組まれている「認知症ケアコミュニティマイスターの会」について、坂本先生からは輪島市の子育ての現状や保育士の立場での看護職との連携や地域住民との関わりについて、大田先生からは広島県福山市の祥和会脳神経センター大田記念病院・地域密着型特別養護老人ホーム五本松の家を中心に行われている地域包括ケアシステムと具体的な活動（出張講座、暮らしの保健室等）についての話題提供があった。参加者は講師の先生方の説明に対して熱心に耳を傾け、先生方の説明後は参加者が実践している地域包括ケアに関する取り組みが述べられるなど、互いに刺激し合える場になった。

４．評価と今後の課題

参加者から、これからの活動に活かせるようなヒントをたくさん頂いた、地域に出ることの意味を知った等の感想が聞かれ、概ね好評であったと言える。本事業の周知は郵送で行ったが反応は乏しく、周知時期、周知方法に課題があった。周知方法を工夫し、今後も地域包括ケアシステムの促進のため、関係各所の方々の意見交換の場を提供していきたい。

１－２－６　新任保健師卒後スキルアップ研修会

１．事業の目的

保健師としての実践能力を確実なものにするため、保健指導を実施するために必要な基本的な知識や技術を習得・確認し、現場で円滑な業務が遂行できるよう支援する。

２．実施状況

実施場所：石川県立看護大学 地域ケア研修室、地域・在宅・精神看護学実習室
参加者数：県内の市町に勤務する就業 2 年未満の保健師 17 名

３．実施内容

・テーマ:「保健指導のホ」

・内容：

第 1 回 平成 30 年 8 月 10 日　意見交換会(保健師として就業しての悩み)
母子保健指導の実際(新生児訪問)
第 2 回 平成 30 年 8 月 24 日　母子保健指導の実際(育児相談･乳児健診･1 歳半児健診
母子保健指導の実際(各市町との情報交換)
母子保健事業の実際(発達の気になる子への支援)
第 3 回 平成 30 年 9 月 7 日　母子保健事業の実際(3 歳児健診)
高齢者保健指導の実際(地域支援事業と介護保険サービス)

・講師: 石川県立看護大学附属地域ケア総合センター　特任講師　竹田 昌代
助言者: 石川県立看護大学 地域看護学講座　准教授　塚田久恵、准教授　阿部智恵子
元 能登町保健師 朝川 由美子

・結果: 乳幼児健診の問診のデモンストレーションや講義を通して、現場ですぐに役立てられるような母子保健指導の実際を学ぶとともに、各市町の母子保健事業についての情報交換を実施した。また、日頃の業務上の悩みやその解決法、自分が目指す保健師像についての意見交換等を行い、今後の保健師活動を考える機会とした。

終了後の参加者のアンケートからは、「同世代の保健師との顔つなぎの機会がもてた」、「普段先輩に聞けない疑問に思っていたことが解決できた」「他市町の母子保健事業の具体的内容を知ることができて参考になった」等の意見が多くあった。

４．評価と今後の課題

保健師個人のスキルアップのための努力と経験の積み重ねの必要性や、同世代の保健師間のつながりや職場の他職種との連携を持つことの必要性を学んだ等の意見が多く聞かれた。

新任保健師が保健指導を実施するために必要な知識や技術に自信を持ち、今後の保健師業務に前向きに取組める動機づけの機会となるよう支援したい。

１－３ 相談サービス事業

１－３－１　各種研修会等への講師派遣事業

看護・福祉・介護専門職の質の向上、県民の健康・福祉の向上、行政課題の解決に資することを目的に、看護研究の支援や、後援・研修等へ本学専任教員が出向いた。

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	
種類	病院等	職能団体 (看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係の任意団体	その他	計
回数	29	6	25	2	2	0	64

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
1	講師 清水　暢子	H30.4.21 13:00～15:00	永平寺町社会福祉協議会 永平寺支所	講演会「認知症になっても安心して暮らせるまちづくり」講師	永平寺町社会福祉協議会 地域包括支援センター	3
2	助教 大江　真吾	H30.5.11 17:30～18:30	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究講師	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	1
		H30.6.13 17:30～19:30				1
		H30.6.14 17:30～19:30				1
		H30.6.15 17:30～19:30				1
3	講師 金谷　雅代	H30.5.19 9:00～12:30	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	1
		H30.6.16 9:00～12:30				1
		H30.10.6 9:00～12:30				1
		H30.12.1 13:30～16:30				1
4	助教 磯　光江	H30.5.1	河北中央病院	看護研究指導・講評	河北中央病院	1
		H30.11.30				1
5	准教授 木森　佳子	H30.6.4 10:30～12:30	公益社団法人 石川県看護協会	実習指導者講習会講師	公益社団法人 石川県看護協会	2
6	助教 曽根　志保	H30.6.7 17:30～18:30	町立宝達志水病院	看護研修会講師	町立宝達志水病院	1
7	准教授 木森　佳子 助教 松本　智里	H30.6.15 13:30～18:30	公立能登総合病院	看護研究指導・講評等	公立能登総合病院	1
						1
8	講師 清水　暢子	H30.6.15	公立宇出津総合病院	看護研修講師	公立宇出津総合病院	1
		H30.11 16:00～18:00				1
		H31.2 17:30～19:00				1

9	准教授 米田　昌代	H30.7.2 13:00～16:00	公益社団法人 石川県看護協会	実習指導者講習会講師	公益社団法人 石川県看護協会	2
		H30.7.3 13:00～16:00				2
10	准教授 垣花　渉	H30.7.14 14:00～16:00	宝達志水総合体育館	スポーツ推進委員合同研修会講師	宝達志水町スポーツ推進委員会	3
11	講師 清水　暢子	H30.7.20 13:30～15:30	エコールみよた	生活・介護支援サポーター養成講座講師	長野県御代田町	3
12	教授 村井　嘉子	H30.7.21 10:00～12:00	能美市立病院	看護研究研修会講師	能美市立病院	1
		H30.10				1
		H31.2				1
14	助教 金子　紀子	H30.7	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	珠洲市総合病院	1
		H30.10				1
		H31.3				1
15	教授 西村　真実子 准教授 米田　昌代	H30.7.27 10:00～12:00	かほく市議会庁舎 かほく市宇ノ気生涯学習センター	子育て支援事業「幼児NP」講師	かほく市	3
		H30.8.2 10:00～12:00				3
		H30.8.10 10:00～12:00				3
		H30.8.17 10:00～12:00				3
		H30.8.24 10:00～12:00				3
		H30.8.31 10:00～12:00				3
16	教授 西村　真実子	H30.8.9 13:30～16:30	石川県庁	児童福祉司養成研修講師	石川県健康福祉部少子化対策監室	3
17	准教授 桜井　志保美	H30.8.17 14:00～15:30	石川県立看護大学	健康セミナー講師	宝達志水町女性の会	5
18	教授 川島　和代	H30.8.26 13:30～13:40	石川県社会福祉協議会 福祉総合研修センター	喀痰吸引等関係研修指導者フォローアップ研修講師	石川県社会福祉協議会	3
19	准教授 塚田　久恵	H30.8.28 9:30～11:30	かほく市役所	介護予防事業講師	かほく市	3
20	教授 武山　雅志	H30.8.29 13:30～15:00	能登町役場能都庁舎	自殺対策人材育成研修会講師	能登町	3
21	講師 川村　みどり	H30.8.1 ～H30.3.31	石川県立高松病院	看護研究指導	石川県立高松病院	1
22	教授 武山　雅志	H30.9.4 10:00～11:30	輪島市門前保健センター	市推進員総合育成講座講師	輪島市	3
23	教授 川島　和代 特任講師 竹田　昌代	H30.9.10 13:00～15:00	かほく市役所	生活支援サポーター養成講座講師	かほく市	3

24	教授 武山　雅志	H30.9.11 9:00～10:20	石川県警察学校	警察安全相談・被害者支援講師	石川県警察本部	3
25	講師 多幡　明美	H30.9.14 14:10～15:50	石川県立看護大学	専門的看護実践力研修【認知症看護】講師	石川県立高松病院	1
26	教授 西村　真実子 准教授 米田　昌代	H30.9.14 10:00～12:00	かほく市議会庁舎 かほく市宇ノ気生涯学習センター	子育て支援事業「乳児NP」講師	かほく市	3
		H30.9.21 10:00～12:00				3
		H30.9.28 10:00～12:00				3
		H30.10.5 10:00～12:00				3
27	教授 武山　雅志	H30.10.16 13:00～16:00	石川県地場産業振興センター	新人看護職員研修講師	公益社団法人 石川県看護協会	2
28	助教 大江　真吾	H30.10.24 18:00～20:00	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究講師	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	1
		H30.10.25 18:00～20:00				1
		H30.10.26 18:00～20:00				1
29	教授 中田　弘子	H30.10	公立羽咋病院	看護研修会講師	公立羽咋病院	1
		H31.3				1
30	准教授 垣花　渉	H30.11.1 9:30～10:15	かほく市立高松小学校	食育授業講師	かほく市立高松小学校	4
31	助教 曽根　志穂	H30.11.10 9:30～10:15	かほく市立大海小学校	薬物乱用防止教室講師	かほく市立大海小学校	4
32	学長・教授 石垣　和子 准教授 塚田　久恵	H30.11.13 9:30～17:00	石川県庁	新任保健師等研修会講師	石川県健康福祉部 健康推進課	3
		H30.11.14 9:00～17:00				3
33	教授 西村　真実子	H30.11.27 10:50～11:30	福井県国際交流会館	子育て世代包括支援センター研修講師	一般社団法人 日本家族計画協会	5
34	准教授 米田　昌代	H30.12.7 13:30～14:20	金沢市立港中学校	助産師が行う「いのちの出前授業」講師	公益社団法人 石川県看護協会	2
35	准教授 塚田　久恵	H31.2.1 14:00～16:00	石川県能登中部保健福祉センター	保健師等人材育成研修会講師	石川県能登中部保健福祉センター	3
36	助教 磯　光江	H31.2.20 17:30～19:00	河北中央病院	看護研究発表会講評	河北中央病院	1
37	学長・教授 石垣　和子 准教授 塚田　久恵	H31.2.26 13:00～15:30 H31.2.28 13:30～16:00	石川県庁 能登中部保健福祉センター	新任保健師研修会講師	石川県健康福祉部 健康推進課	3
						3
38	准教授 石川　倫子	H31.3.21 10:00～12:30	輪島市内	看護研修講師	公益社団法人 石川県看護協会	2

１－３－２　病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）

地区/県	派遣病院名	指導内容	講師名		回数
金沢	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	講師	金谷　雅代	4
	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究講師	助教	大江　真吾	7
	河北中央病院	看護研究指導・講評	助教	磯　光江	3
	石川県立高松病院	看護研究指導	講師	川村　みどり	1
		専門的看護実践力研修講師	講師	多幡　明美	1
能登	町立宝達志水病院	看護研修会講師	助教	曽根　志保	1
	公立能登総合病院	看護研究指導・講評	准教授	木森　佳子	1
			助教	松本　智里	
	公立宇出津総合病院	看護研修講師	講師	清水　暢子	3
	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	助教	金子　紀子	3
	公立羽咋病院	看護研修会講師	教授	中田　弘子	2
白山	能美市立病院	看護研究研修会講師	教授	村井　嘉子	3
				計	29

２　地域連携・貢献事業

２－１ 地域連携事業

２－１－１　来人喜人能登健康づくり支援事業

１．事業の目的

能登町は産業基盤が脆弱であり、かつ就学、就職時に若者が町外に流出し、少子高齢化、過疎化が急激に進行している。2010 年度の高齢化率は能登町の 40.1%、2035 年度予測は 52．6%であり、生産年齢人口が高齢者人口を大幅に下回りつつある。それに伴って、地域住民の健康な生活を支えていた地域のシステム、伝統文化、コミュニティの絆、地域産業などが減退しつつある。そうした現状を踏まえると、能登町の最大の課題は少子高齢化と高齢者等の医療、介護である。その補完的な解決策として交流人口の拡大と健康に関わる社会的文化的な活動の強化が考えられる。本プロジェクトでは看護大学の特色を踏まえ、健康問題、特に健診率向上キャンペーンを展開すると同時に、運動と食事生活に関わる文化、社会活動において地域で活動する諸団体と連携、交流しながら住民の健康づくりをサポートする。

２．実施状況

平成 30 年年 5 月 6 日　「第 32 回猿鬼歩こう走ろう健康大会」に参加。健康キャンペーン実施。
平成 30 年 10 月 27 日～28 日 石川県立看護大学学園祭にて「クライネメッセ」・能登フェア開催。

３．実施内容

・能登町健康福祉課、健康大会事務局、能登高校地域創造学科、能登町社会福祉協議会など能登町の連携団体と協力しながらその活動を支援することができた。
・歩こう走ろう健康大会では、大学から学生（7 名内大学院生 2 名）、教職員および本学関係者（9 名）が参加し、地域間交流ができた。
・大会での健康キャンペーンでは、学生も健康チェックに参加し、大会参加者や地元住民との交流ができた（100 名）。大会に健康キャンペーンを継続して参加してきた結果、健康チェックの参加者が年々増加している。
・風船配りは、毎年の恒例となり、地元の園児、小学生との交流もできた。
・学生が「けんしん君」の着ぐるみを着て、特定検診・がん検診の受診を呼びかけた。
・能登町と看護大学が連携して住民の健康を支援するネットワーク基盤ができ、大会実行委員長より、次年度の参加の要望もあった。
・大学祭でのクライネメッセでは、ジェラード、能登野菜、能登牛丼の販売を通した能登地区の紹介を行い、かほく市民との交流ができた。また、能登高校の出店で、充実した能登のＰＲ活動ができた。
・看護大学の学生、教職員の能登への関心が高まった。

４．評価と今後の課題

・引き続いて住民の健康づくりに意義があると思う事業をこれまで培ってきた連携のネットワークを使って実施する。
・本事業とそこで育んできた枠組みを基盤として、本学が一つの目標とする「地域の健康づくりにアプローチできるグローカルな視野を持った人材を育成」（ヒューマンヘルスケア人材育成プロジェクト）に展開、発展させたい。

２－１－２ 「ワクワク健康サークル」活動

１．事業の目的

「スモールチェンジ活動」とは、健康の維持・増進を目指し、①続けられる小さな行動から始める、②続けられたら行動のレベルを少し上げる、③続ける工夫をする、という段階的な健康づくりの手法である。本事業は、「スモールチェンジ活動」を通して住民主体の健康づくりの仕組みをつくるため、大学はそれを支援することを目的とする。

２．実施状況

看護大学近隣の市や町に住む者を対象に、毎月第３or４水曜日の 19 時～20 時半に健康教育を実施する。毎月のテーマを参加者が決め、教員と学生はテーマに基づく講義、グループワーク、体操を行う。

３．実施内容

4 月：テーマ「認知症とは」、学生：20 名、一般：19 名
5 月：テーマ「認知症の予防」、学生：24 名、一般：16 名
6 月：テーマ「認知症の予防」、学生：20 名、一般：16 名
7 月：テーマ「熱中症」、学生：16 名、一般：18 名
8 月：テーマ「筋肉を鍛える体操」、学生：1 名、一般：12 名
9 月：テーマ「大切な歯を守ろう」、学生：10 名、一般：12 名
10 月：テーマ「糖尿病)」、学生：12 名、一般：16 名
11 月：テーマ「健診結果の見方」、学生：13 名、一般：28 名
12 月：テーマ「クリスマス交流会」学生：12 名、一般：14 名
1 月：テーマ「冬によくある健康トレブル」、学生：7 名、一般：10 名
2 月：テーマ「ピラティスの体験」、学生：5 名、一般：16 名
3 月：テーマ「こころと身体のリラクゼーション」学生：10 名、一般：11 名

４．評価と今後の課題

毎月の活動を、着実に開催することができている。今後の課題は、一般の参加者を増やすことにある。

２－１－３　棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり

１．事業の目的

高齢者が主体的に社会参加する、または互い支え合うという地域づくりの行為そのものは、高齢者自身の健康を維持・増進させることが明らかにされている。このことは、著しい人口減少と医療体制の脆弱さを抱える限界集落の活性化策としても注目されている。本事業は、限界集落を舞台に、地域資源である「食」「緑」「人」を活かした地域づくりを住民が主体的に行い、研究者や専門職者はそれを支援する体制を構築することを目的とする。

２．実施状況

看護大生は限界集落へ出向き、住民と交流を深める。協働する地域活動は、かぼちゃの農作業体験、住民の健康チェック、民泊体験、秋の幸せ収穫祭の開催、そば祭りの開催である。

３．実施内容

- ４月：地域資源を探す意見交換会（参加者：学生 7 名、住民 21 名）
- ５月：住民の形態・体力測定（参加者：学生 13 名、住民 12 名）
- ６月：農作業体験（参加者：学生 7 名、住民 3 名）
- 10 月：秋のしあわせ収穫祭の開催（参加者：学生 10 名、住民 28 名）

４．評価と今後の課題

予定した交流地域活動は、おおむね行うことができた。一方、冬の天候不順のため、そばの収穫に関するイベントを実施できなかった。

２－１－４　モールウォーキング事業

１．実施目的

モールウォーキング事業は、冬場の運動不足の解消を目的とした「か歩く健康ウォーキング」事業に、かほく市およびイオンモールかほくと連携して取り組み、参加住民の健康チェックとモールレッスンにおけるミニ講話等を行うことを目的としている。

２．実施状況

○歩数計活用型健康ウォーキングの事前健康チェック
　平成 30 年 8 月 20 日（月）～8 月 22 日（水）かほく市ほのぼの健康館
○か歩く健康ウォーキング事業開会式および健康チェック
　開会式　平成 30 年 9 月 1 日（金）10 時～11 時　　イオンモールかほく　センターコート
○モールレッスン
　平成 30 年 7 月 27 日（金）「筋肉は健康のバロメーター　サルコペニアを知ろう」
　平成 30 年 10 月 12 日（金）「よい睡眠とれていますか」
　平成 31 年 2 月 28 日（木）「運動習慣による心と体の変化　－２年間のまとめー」
○か歩く健康ウォーキング事業閉会式
　閉会式　2 月 28 日（木）10 時半～12 時　イオンモールかほく　センターコート
○歩数計活用型健康ウォーキングの事後健康チェック
　平成 31 年 3 月 11 日（月）～3 月 14 日（木）かほく市ほのぼの健康館

３．実施内容および成果

歩数計活用型健康ウォーキングの登録者 183 名（継続 163 名、新規 20 名）に対して事前の健康チェックを教員のべ 36 名と学生のべ 27 名で実施した。事後の健康チェックは教員のべ 23 名と学生のべ 30 名で実施した。

モールレッスンではそれぞれ 85～220 名ほどの参加者があり、教員 3 名で対応した。

本事業の２年間をまとめた結果、本事業参加以前に運動習慣があった方もなかった方も持久力を示す３分間歩行やその時点での気分をします POMS２において改善が認められた。しかし事業の合間の期間にどうやって運動習慣を継続させていくのかという点があることが明らかとなった。

４．評価と今後の課題

本事業の継続者の人数にはそれほどの減少は認められないが、新規参加者がかなり少ないという結果となった。

今後は参加者に変化が実感できるよう、よりきめ細かなプログラムを構築していく必要があると考える。

２－１－５ かほく市子育て支援学生ボランティア事業

１．事業の目的

かほく市が平成 27 年 10 月にこども総合センターをオープンした。この子育て支援の拠点を会場に、本学の子育て支援に興味を持つ学生ボランティアとかほく市子育て支援課とタイアップし、学生のボランティア活動を実施する。また、各種事業に参加したり、学生自ら企画した活動を実施する。このことより、学生にとっては実際的なこどもの発達や母子保健に関するニーズ等を学ぶことができる。また、かほく市の子育て支援活動に看護学生として貢献することができる。

２．実施状況

平成 29 年度に子育て支援の学生ボランティアサークルが発足、活動を開始し、継続的に活動している。かほく市主催の子育て支援に関するイベントの補助としても活動した。

３．実施内容

平成 30 年度の活動内容は以下のとおりである。

＜子ども総合センターの活動＞

・子ども総合センターで託児・絵本の読み聞かせ活動（土曜日：学生 2～3 名参加）

・イクメン推進事業でのボランティア

6 月：妊婦体験、新生児人形の抱っこ体験の補助

10 月：イクメンプロジェクト in かほくイオンでのボランティア

・9 月：わくわく運動会ボランティア

＜その他の子育て支援関連ボランティア活動＞

・8 月：学園台こども園夏まつりのボランティア

・10 月：大学祭で絵本の読み聞かせを実施

・11 月：子育て支援メッセいしかわでのボランティア

・12 月：ボランティア交流広場 2018 への参加

・3 月：読み聞かせに関する研修を受講

４．評価と今後の課題

サークル員 29 名が活動した。託児・読み聞かせボランティアは、2～3 名ずつで参加しているので、無理がなく継続できている。活動を通じて、学生は子どもたちと直接触れ合い、かかわり方を学ぶ機会になり、また、親子のかかわりを学んでいる。

今後も子育て支援課、かほく市の保育士や保育ママ等と連携、助言を得ながら継続的に活動していく。さらに、活動は様々な子育て支援関連のボランティアに広がっており、サークルとしての活動を展開していく。

２－１－６　災害につよい街づくり事業

１．実施目的

東日本大震災で被災された多くの住民が仮設住宅から災害公営住宅へとその生活基盤を変えようとしているのが現状である。しかしその地での新しい絆づくりという新たな課題が今まさに生じている。被災地およびかほく市それぞれの社会福祉協議会や関係団体と連携して、高齢化の進む地域の災害につよい街づくりに貢献したいというのが目的である。

２．実施状況

〇災害につよい街づくりフォーラム 2017

日時：平成 30 年 11 月 18 日（日）10:00～12:00

場所：石川県立看護大学　大講義室　　参加者：105 名

内容：

・「地域防災の取組と活動・災害に備えるために」

（仙台市地域防災リーダー・福住町町内副会長・防災・減災部長・大内幸子氏）

・活動報告　　外日角、七窪、大崎、災害ボランティア・サークルふたば

〇被災地学生ボランティア活動

日時：平成 31 年 3 月 5 日（火）～3 月 7 日（木）

場所：宮城県亘理郡亘理町

内容：3 月 6 日（水）10 時～12 時　　浜吉田北区集会所　　サロン活動

13 時半～15 時半　西木倉災害公営住宅集会所　サロン活動、個別訪問

サロン活動：血圧測定、写真立て飾りつけ、百歳体操、茶話会ほか

16 時～16 時半　　「亘理町の現状と課題」

亘理町社会福祉協議会・佐藤秀憲氏

参加人数：学生 30 名、教員 3 名

３．実施成果

災害につよい街づくりフォーラムでは仙台市福住町で活発な防災活動を展開されている大内氏に基調講演をお願いした。地域住民と子どもたちが一緒になって防災訓練を実施している様子を聞き、参加されていた地元住民の方にも大いに刺激になったようである。

被災地学生ボランティア活動においては宮城県亘理町の浜吉田北区集会所では 30 名の住民の参加があった。午後からは西木倉災害公営住宅集会所で 22 名の住民の参加があった。

平成 29 年度にサロン活動を行った一本松地区からも浜吉田の会場に駆けつけていただいた方もありにぎやかなサロン活動となった。

また平成 28 年度から継続してお願いしている個別訪問を生活支援相談員の方と一緒にさせていただいた学生も一部あり、災害公営住宅のお部屋ではさまざまなお話を伺うことができた。

最終日は「閑上（ゆりあげ）の記憶」に立ち寄り、次男を亡くされた語り部の方のお話を聞くことができた。

４．今後の取組予定

平成 30 年度も被災地学生ボランティア活動は亘理町社会福祉協議会の担当者や民生委員の方々のご協力もあり大変盛況に終えることができた。東日本大震災から 8 年が経過し、「被災地」という言葉がふさわしくない状況にもなってきている。今後の活動のあり方と本活動で学んだこ

とをどのように地元に還元していくかを検討する時期になってきていることを実感している。

２－１－７　農福連携いしかわ型ヒヅジ飼育体験教室

１．事業の目的

今後、就労を考えている精神障害のある方や特別支援学校の卒業を控えている方、就労支援を行っている事業所を利用されている方を対象に、ヒツジの餌やり・肥出し（糞だし）・餌作りなどを通じて畜産体験を行ない、このヒツジ飼育体験を通して、参加された方が動物やそれを飼育している人への関心、就労への意欲や希望、社会活動や社会参加への意欲、畜産農家や畜産業への関心を持ってもらうことを目的に実施した。

２．実施状況

対象：石川県内の精神科デイケア施設　就労支援対象者とその指導者
　　地域活動支援センター利用者とその指導者
講師：石川県立大学　　生産科学科　教授　石田元彦
　　石川県立看護大学　在宅看護学　助教　山﨑智可
　　精神看護学　講師　清水暢子
協力：日本海倶楽部　就労継続支援Ｂ型事業所　ザ・ファーム

表 1. **開催日時・主催・場所・参加人数について**

回数	月日	時間	参加事業所	人数
第１回	H30. 9. 11（火）	8:00 ～18:00	岡部病院デイケア　ピア 十全病院デイケア　フルフル	15 名
第２回	H30. 9. 18（金）	8:00 ～18:00	泉の家　地域活動支援センター	12 名

３．実施内容

ヒツジ飼育についてのミニレクチャーとお散歩体験

ヒツジ飼育で毎日行っている仕事内容を就労支援事業所で現在飼育を担当しているメンバーから説明があった後、餌やり、糞だし、散歩を行った。ヒツジは群れる習性があり、一頭でも群れから離れると大騒ぎで声をあげて鳴きだし、そのため、散歩ではまとまって歩くヒツジに引っ張られながら体験者もお団子になって歩いていた。体験学習参加者からは「最初は不安でいっぱいだったけれど、来たら不安はふっとんだ」と体験学習後の前向きな感想が聞かれた。また、見学の受け入れをした就労支援事業所利用者も「自分たちの仕事をする姿を見てもらえて、自慢できる」とヒツジ飼育の仕事を誇りに思っている様子だった。11 月にはヒツジの毛刈り体験を実施し、地元の保育園、小学校低学年の児童約 30 名が参加した。地域と障害者施設の連携ともなり、障害者への理解にもつながった。

４．実施成果

体験学習参加者のうち同意を得られた 14 名に体験実施中の不安意識の変化、活動量や心拍数変化、唾液中不安尺度の変化について、体験学習以外の普段の活動の時と比べてどう変化したかを分析した。その結果について、体験参加者へのフォードバックを行い、ヒツジ飼育や畜産業への関心、就労意欲や就労についての不安解消等に役立てるにはどうすればよいかを参加スタッフとともに説明した。

５．評価と今後の課題

今回は、ヒツジ飼育が安定した時期を選んでの参加対象該当施設への案内であったため、施設側も通常プログラムとの調整が難しく、参加同意が得られた施設が 3 施設と予定より下回った。特別支援学校への働きかけは教育委員会へ申請する必要があり、事業参加働きかけが難しい。次回は早期にプログラムの作成、参加呼びかけを行う必要がある。

写真 1 ヒツジ飼育のミニレクチャーを事業所メンバーから受ける参加者

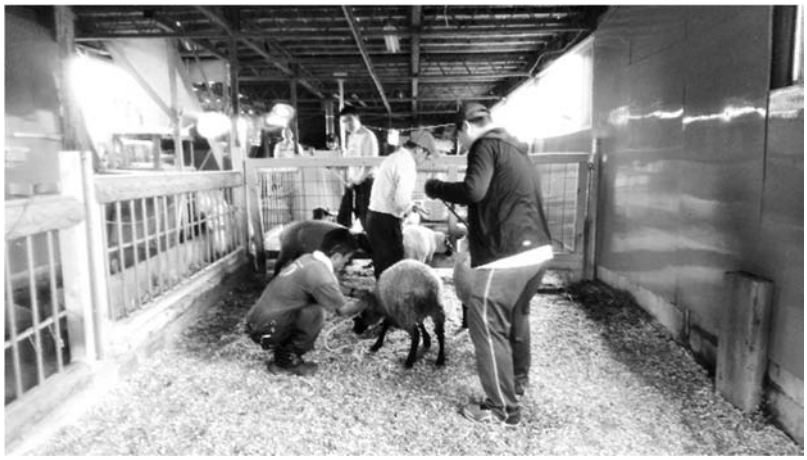

写真 2 お散歩体験中の参加者

２－２ 生涯学習講座

２－２－１　どろっぷ・いん・さろん

１．事業の目的

子育てに悩みをもつ母を対象に、①エンパワーメント、②サポートし合う仲間づくり、③自分が取り入れられそうな子育て等のやり方・考えの獲得、④自分の客観視、⑤子育てへの不安や困難感の軽減、⑥レスパイト・ケアの６点をねらいとし、子どもと離れて過ごす場所の提供と、悩みについて安心して話せるグループミーティングなどを行った。

２．実施状況

実施状況：

1）**どろっぷ・イン・るーむ(午前)**:託児を行い、母親には一人でまたは、他の参加者と自由に過ごす時間・場所を提供する。スタッフも母親の相談に対応する。

2）**NP 親育ち・子育ちを考える会(午後)**:Nobody's Perfect 親支援プログラム(以下 NP)参加経験のある母親を対象に、託児を行い、NP 方式を取り入れたグループミーティングを行う。

【スタッフ】西村真実子、米田昌代、金谷雅代、曽山小織、千原裕香、山田ちづる、
後藤亜希（本学修了生)、院生

回数	開催日	るーむ参加者	考える会参加者	託児児童数
1 回	H30.8.8　（水）	5 名	6 名	8 名
2 回	H30.9.10　（月）	4 名	6 名	4 名
3 回	H30.10.2　（火）	4 名	6 名	4 名
4 回	H30.11.6　（火）	4 名	6 名	4 名
5 回	H30.11.26（月）	4 名	5 名	4 名

３．実施内容

「NP 親育ち・子育ちを考える会」で話し合われた主なテーマ

1 回目：2～5 回目のテーマ出し、およびイライラを収める方法（解消法）
2 回目：反抗期やイヤイヤ期の対処法、子どものお小遣い・お年玉について
3 回目：子どもの怒り方や怒った後のケア、肩こり解消法
4 回目：思春期の子との距離の取り方・見守り力、怒る・叱るタイミング
5 回目：オムツ外しの進め方、子どものスイッチを変える言葉、
子どもの前での夫との関わり方

４．評価と今後の課題

・参加者から「みんながイライラしてしまう場面が同じポイントにあって安心しました」、「子どもだけでなく自分も成長していきたい」という感想が聞かれるように、同じような悩みを抱える仲間に受け入れられることにより安心感等が得られること(毎年参加者もいる)や、悩みや経験・考えをサポーティブに共有する話し合いを通して現実吟味/カタルシス/自分に取り入れられるやり方・考えの獲得等が起こり、日々の子育て等にプラスに働いていることが伺える。また、乳幼児期だけではなく思春期を迎える子どもへの接し方について考える機会もあり、幅広い年齢層の子どもを持つ親同士の仲間づくりの場となっている。

・上記のように安心感が得られる場となり、ここ数年、参加される方が固定されてきている傾向がある。これまでは以前に NP プログラムに参加された方を対象に参加募集をしていていたが、今後は子育て広場や市町村にもポスター掲示など依頼して広く募集をし、新たな参加メンバーを募っていく。新たなメンバーが加わることで、これまで参加されていた方にも、新たな悩みや経験・考えを共有することができると考える。

２－２－２　あかちゃんをお空にみ送った方の自助グループに対するサポート活動

１．事業の目的

あかちゃんを亡くされ方がアクセスしやすいような体制作りと会の広報、お話会開催によって、あかちゃんを亡くされ方の自助グループ活動を支援する。また、個別相談体制、医療施設・行政との連携を強化していく。

１）お話会の運営をサポートする。

２）体験者、臨床、地域からの相談があった場合、4 つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

２．実施状況　３．実施内容

①お話会開催　日時・場所

対象：あかちゃん（流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等）であかちゃんを亡くされ方
ただし、ひまわりの会は年齢を問わずお子さんを亡くされ方

回数	月日	時間	主催	場所	参加人数
第 1 回	H30. 4. 22（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	6
第 2 回	H30. 6. 4（月）	10:00～12:00	小さな天使のママの会	津幡町福祉センター	7
第 3 回	H30. 7. 22（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	白山市市民工房うるわし	6
第 4 回	H30. 10. 1（月）	10:00～12:00	小さな天使のママの会	津幡町福祉センター	7
第 5 回	H30. 10. 28（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	金沢勤労者プラザ	6
第 6 回	H31. 1. 27（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	8
第 7 回	H31. 2. 4（月）	10:00～12:00	小さな天使のママの会	津幡町福祉センター	7

②適宜メール相談・電話相談・面談

昨年の体験者とのメールでのやりとりは年度始めまで継続していたが、お話会にもつないだこともあり、その後、落ち着かれた。また、体験者の中で 2 人の方は次の妊娠をされ、不安定な妊娠生活を送られたが、1 名は無事、出産にいたったという報告があった。今後も適宜フォローしていく。

③ひまわりの会　自殺予防活動

平成 30 年 12 月 9 日（日）13:30～16:00　こころの健康づくり講演会　運営・参加
石川県・かけがえのない命をまもるネットワークいしかわ(ひまわりの会所属)　主催

④体験者の話を聞く場

平成 30 年 7 月 4 日（水）13:00～14:30　母性看護方法論の講義枠で自助グループ代表者・メンバーの方に語っていただく。

⑤広報活動

2 月に各医療施設・行政の母子保健担当に情報を更新した新しいちらしを郵送・配布した。第 12 回東アジアグリーフの集い（東京・八王子開催）のブースにて配布した。来年度は金沢で開催予定。こころの健康センターの広報誌に掲載していただいている。

⑥全国のあかちゃんを亡くした方の自助グループ（天使がくれた出会いネットワーク）との情報交換

東アジアグリーフの集いにて一部の自助グループメンバーと交流した。

⑦石川グリーフの会との連携

今年度よりあらゆるかけがえのない対象の喪失への悲嘆に対応する石川グリーフの会をたちあげた。2ヶ月に1回、グリーフケアカフェを開催し、哀しみを打ち明ける場を提供している。この会とも連携しながら、今後、相談に対応していく。

４．評価と今後の課題

お話会は毎回、6～8名の参加者がみられ、新規の参加者も毎回みられることから、今後も定期的お話会開催は必要である。お話会開催までに日数がある相談についてはメールおよび小グループでの対応に心がけている。今年度もメールにて、2件相談依頼があった。お話会参加までは勇気がない方は、メールのやりとりの中で少しずつ、前向きになられる様子もみられ、そこからお話会参加につながったり、次の妊娠成立や日常の生活にもどっていかれるため、今後もメールでの対応を続けていく。

新しいちらしを作成し、年度末に配布することができた。連絡先の変更が多かったため、今後の連絡はスムーズになると考えている。津幡町の小さな天使のママの会は行政の担当者退職のため、津幡町の会場を使用しにくい状況になったため、来年度は看護大学でお話会を実施する予定である。

今後、津幡町での開催方法について模索していく。新しく発足した石川グリーフの会とも連携していく。

２－２－３　ヘッドマウントディスプレイを使用した「認知症疑似体験教室」

１．事業の目的

本企画は認知症疑似体験プログラム用に開発されたＤＶＤを使用し、参加者にはヘッドマウントディスプレイ；HDM を装着してもらい、そこに映し出される映像や音声により認知症高齢者の視線や移動の速度、行動を疑似体験してもらう。その体験が地域住民への認知症高齢者の理解をうながす啓発活動として、また認知症を正しく理解すること、認知症高齢者に対して人としてあたたかく接することができるような認知症支援者への啓蒙活動を目的とする。

２．実施状況

対象：介護予防・認知症予防講習会、家族介護者の介護教室や
認知症サポーター研修など地域活動の勉強会参加者、
介護専門職者勉強会または、その指導者

講師：石川県立看護大学　精神看護学　講師　清水暢子
協力：石川県立看護大学　看護キャリア支援センター

表 1. **開催日時・主催・場所・参加人数について**

回数	月日	時間	開催場所	人数
第 1 回	H30．4．20（土）	13:30 ～15:00	福井県永平寺町キャラバンメイト養成講座	30 名
第 2 回	H30．7．20（金）	13:30 ～15:00	長野県御代田町生活・介護支援サポーター養成講座	28 名
第 3 回	H30．8．24（金）	13:30 ～15:00	長野県御代田町キャラバンメイトスキルアップ研修	68 名
第 4 回	H30．11．24（土）	13:30 ～15:30	羽咋市社会福祉協議会介護者のつどい研修会	15 名

３．実施内容および成果

1)【平成 30 年 4 月 20 日、8 月 24 日】「認知症の人にやさしいまち」

イメージとしては大事だと思う人が多いものの、一方で、何をもって認知症の人にやさしいとするのか、あるいは、何をすればいいのか、とあいまいになっている。そこで、認知症の正しい理解を深めた上で自分たちにできることは何か、身近にできる取り組みについて考えてもらった。

2)【平成 30 年 7 月 20 日、11 月 24 日】「認知症疑似体験教室、認知症の人が見る世界」

ヘッドマウントディスプレイを装着し、認知症疑似体験プログラム用に開発された DVD でディスプレイに映し出された映像や音声を通して、認知症高齢者の視線や移動の速度、行動を参加者に疑似体験してもらい、それを通して実施前後の認知症者への理解を比較した。結果、「見守りやお世話が常に必要な人」「突然、怒ったり騒いだりする人」から実施後には「不安で困っている人」「自分なりに精一杯生きている人」に参加者の認知症高齢者に対するイメージが変化した。特に 11 月 24 日は当事者とそのご家族も参加し、今までの過程や家族、本人の思いについても語っていただき、認知症への理解がより一層深まった。

４．評価と今後の課題

今後も、認知症サポーター養成講座などを中心に、正しい認知症の理解と、自分たちの町でできることを疑似体験を通して参加者に考えてもらう。その体験学習を通して認知症高齢者に対する普及啓発活動の一環として本事業は継続して行っていく。１人でも多くの地域で生活する人が、認知症者への正しい理解が進むと同時に認知症があっても安心して暮らせる町づくりに貢献していく。

写真 1. ヘッドマウントディスプレイを使用しながら認知症疑似体験を行う参加者

写真２．認知症者の気持ちについて話し合う参加者

２－２－４　オルゴール療法で体も心もリフレッシュ～がん体験者同士で語ろう～

1. 趣旨

オルゴール療法には「治療効果」として、「想像力の開発」「心理的効果」があるといわれています。がん体験者は自身の病気の悩みのみならず、毎日の家事、仕事、育児、治療の忙しさから離れることができず多くのストレスを抱えていると言われている。そこで、そういった現実から少しでも離れる場を提供するなかで、今後のサバイバーとしての生き方に英気を養えるのではないかと考えた。

今回は、オルゴール療法を体験し、同じ体験者同士で語り合うことを通じて、同じような悩みを抱えている人が他にもいるという体験をしてもらおうと企画した。

２．実施状況

・当初は平成 30 年 9 月 29 日(土)に開催を予定していたが、台風の影響で平成 30 年 10 月 28 日(日)に延期となった。そのため、参加者の都合で当日キャンセルせざるを得ないがん体験者が 2 名いた。

・担当責任者：牧野智恵（石川県立看護大学　教授）
　　瀧澤理穂（石川県立看護大学　助教）、今方裕子（石川県立看護大学　助教）、
　　学部生（4 年生）2 名

・参加者数；　がん体験者　4 名

３．　プログラム内容

10：30～11:10　アロマ抽出体験
11：10～12:15　オルゴール療法体験
　　～休憩～
13：30～14：40　対話タイム
　　（がん体験者と本学教員参加）

４．評価と今後の課題

本企画は、平成 29 年までの 3 年間、がん体験者とその子供を対象に同時に実施していた際、「子供をおいてゆっくりしたい」という参加者の声を基に企画した。その結果、今回の参加者からは、「ゆっくりできた」「体がぽかぽかした」「すっきりした」などとの声が聞かれた。

日頃、自身のがん罹患にもかかわらず、仕事や家事、育児などの中で、自分の抱えるストレスへのリフレッシュができないまま過ごしていたようであった。今回のような企画を意図的に実施することの重要性を再確認できた。

また、午後から実施した「対話タイム」では、主に、家族（親、夫、子供）に自身ががんに罹患したことを伝える際に困ったことを含め、日頃の悩みについて自由に語り対話してもらった。同じ悩みを抱えるものはおらず、それぞれの家族構成や年齢、癌腫などが違う場合、違う悩みを抱えており、互いの話に耳を傾けている様子が印象的であった。患者のみならずがん専門の医療者との対話も気分転換になったようである。

今後の課題としては、参加者公募の時期を検討し、参加者を増やしていく必要がある。また、今後は、がん患者（特に終末期）に関わる看護者も多くのストレスを抱えているという報告もあり、そういった看護師を対象に同様の企画を検討していきたい。

２－３　ワンストップサービス事業

1.　事業の目的

ワンストップサービス事業の目的は、石川県内の市町村、企業、NPO などの市民を対象とした地域貢献事業についての相談を受け付け、運営が円滑に行われるように支援することである。また石川県立看護大学が立地する地元かほく市の企業をはじめ、石川県内における看護・介護・福祉等の領域におけるさまざまな製品や用具の開発など、本学専任教員との共同研究について相談窓口を一本化し相談体制を整えることである。

2.　平成 30 年度の事業実績について

平成 30 年度の実績はなかった。

３　国際貢献事業

３－１　ＪＩＣＡ日系研修

「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成19年度から開始され、平成30年度は12期目の研修生を受け入れた。11期目からはボランティアを担う者ではなく、日本人会の幹部層を対象として実施することとなった。

１．研修目的

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護について講義で学びつつ、地域の施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

２．研修実施体制

（１）研修期間：平成30年6月29日（金）～7月9日（月）
（２）研修員数：2名　パラグアイ共和国　佐藤　満氏（ピラポ日本人会　事務局長）
　　パラグアイ共和国　荒槇正身氏（アスンシオン日本人会　福祉担当）
（３）研修場所：石川県立看護大学、羽咋市社会福祉協議会
（４）講　　師：川島和代　中道淳子　磯光江　渡辺達也（石川県立看護大学）
　　岩城和男　毛利浩　柳沢昌代　宮下陽江　中元美幸（羽咋市社会福祉協議会）

３．研修内容（別紙　スケジュール参照）

短期間の研修であることから、高齢社会、高齢者福祉、ケアシステムをキーワードとした関連施設の視察と講義を取り入れたプログラムとし、高齢者福祉制度や日本の文化、ケアシステムなどを講義で学びつつ、地域の施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、その実際について学ぶ。

４．研修目標・評価指標

（１）研修目標

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護について講義で学びつつ、地域の病院や施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

（２）指標

帰国後、日系社会で高齢者福祉のシステムや人材育成に関して、個人的なスキルアップのみならず、組織的に今後ことについて取り組んでいくための具体的な活動を計画できる。

５．評価（総括）

（１）プログラムの妥当性

フォローアップ調査に参加した看護大学教員と羽咋市社会福祉協議会職員が、前年度行ったプログラムをもとに今年度の研修に関して話し合い、現地の実情に合わせた内容にできたと思う。研修員からの研修に対する評価も高かった。今年度は昨年度に比較してディスカッションの時間を多く設けたため、帰国後のアクションプランに関して具体的なプランを立案することができた。しかし、具体的になった内容を詳細に検討する時間、まとめる時間が足りなかった。

（２）研修時期、実施体制

開講式や閉講式の日を除くと、1週間という短期間であることは昨年と同様であり、研修員からは、来日してから来県するまでの日程も、石川で研修したほうが身になると感じると伺った。来県までの日時に関しては、JICA での検討事項とし、来県以降の実質的な研修期間を来年度から数日（1or2 日）延長することとした。

また、これまでの 11 年に及ぶ日系研修の実績により、特に羽咋市において、視察研修の受け入れは大変スムーズであった。

（３）研修生の準備状態

今年度の研修生も両者とも高い日本語会話能力であり、日常会話での意思疎通は十分に図れた。しかし、カントリーレポートの発表ではスライドは自国で仕上げてあったものの、発表原稿は作成しておらず、発表の時間が長引き、質疑応答の時間を設けることができなかった。研修最後の成果発表においても、パソコンを持ってきていないことから、大学や羽咋市社会福祉協議会のパソコンで担当者がパワーポイントを作成した。発表内容に関しては流ちょうな日本語で自分の言葉でしっかり伝えることができており、質疑応答も問題なくできた。

（４）自立発展性の観点から

日本人会幹部向けの視察型の研修を企画し、男性幹部に参加していただくことができた。

佐藤研修員のピラポ移住地でモデル事業として、高齢者の介護予防活動に取り組むプランに取り組んでいくことを発表した。これは現在ボランティアグループが中心となって行われている、デイサービス事業の対象者のみならず、各地域で健康づくりの活動を進めていくものである。その中に、体力測定の機会を設け、同じように介護予防・健康づくりに励んでいる研修先の羽咋市の高齢者と体力測定結果を比較し、お互いの活動継続の励みとしながら、交流していく内容である。佐藤研修員会らは、帰国後ボランティアグループに話し、本プランに概ね理解が得られたとの報告も聞かれた。

荒槇研修員は、佐藤研修員のモデル事業をパラグアイ全域に広げるにあたってパラグアイ日本人会等への働きかけなどを行っていく。また、現在かかわっているアスンシオンでのデイサービスのボランティア活動において、参加している高齢者をお客様扱いするのではなく、できることをしていただくように変えていくことを発表の質疑応答の場で確認した。

両者は、今後のモデル事業の取り組みを協力して進め、パラグアイ日本人会組織を巻き込んで、高齢者の介護予防システム作りを進める草の根事業に発展させていくことにつながるのではないかと考える。

（５）日本社会への還元について

研修員には、様々な機会（看護大学の 2 年生の講義時間、地域の高齢者の集まりの場）に、パラグアイ国や日系移住地の暮らしなどをご紹介いただいた。大学や羽咋市といった限られた場ではあるが、継続的にパラグアイ共和国との国際交流ができている。

また、今後はパラグアイと羽咋市の高齢者の介護予防活動や体力測定を通じての交流に発展していけるように取り組んでいくとより一層、国際交流が促進されると思われる。

研修の光景（スナップ写真）

写真1　開講式における研修生の挨拶

写真2　カントリーレポートの発表

写真3　閉講式後、関係者と記念撮影

写真4　送別会（乾杯）

３－２　ＪＩＣＡ青年研修

「地域保健医療実施管理」コース

１．はじめに

JICA 青年研修事業は、発展途上国の人材育成を促進する目的で、将来の国づくりを担う若手人材を日本に招き専門分野の研修を提供するものである。平成 30 年にカンボジア 14 名の研修員を迎え「地域保健医療実施管理」コースが本学において実施された。

実施に際しての地域保健医療に関する問題意識としては以下である。

（１）近年、カンボジアでは、母子保健対策の推進により、乳幼児死亡率は徐々に改善し、多産多死社会から少産少死社会へ移行のきざしを見せているものの、母子保健状態の改善に向けた更なる発展が期待されている。

（２）感染症に関しては、平成 27 年のデータによると、結核による死亡率、罹患率、有病率とも ASEAN 諸国の中では最も高い。結核のみならず HIV/AIDS、マラリア、デング熱などに対する対策の充実が求められている。また、安全な水へのアクセス、トイレの改善、ゴミの処理など、基本的な公衆衛生機能の充実も必要である。

（３）平均寿命の延伸に伴い疾病構造の変化が予測される。生活習慣病の対応などについては、今後の充実が必要である。また、高齢化に対応すべくリハビリテーションや介護施設なども今後視野に入れていく必要がある。

（４）地域の保健医療体制を整え、保健サービスの実行に向けて推進できる人材確保が課題である。

２．研修目標

将来のリーダーとして感染症ならびに生活習慣病などの予防医学・公衆衛生分野における課題解決を担う青年層の知識と意識の向上を目指し、当該プログラムに参加することにより、以下の項目の達成を目標とした。

（１）予防医学、公衆衛生の概念を理解し、意識が向上する。

（２）予防医学、公衆衛生の向上のために、リーダーとしての必要な知識と意識が身につく。

（３）地域医療・保健のシステム、制度の重要性を理解し、自国の状況と課題に応じた予防活動を行うための基本的な考え方が身につく。

３．研修実施体制

（１）研修期間：平成 30 年 11 月 29 日～平成 30 年 12 月 11 日

（２）研修員：14 名の地域保健医療に携わる医療従事者、医療行政官（医師 2 名、助産師 5 名、看護師 4 名、保健省技官 1 名、データ管理事務官 1 名、薬品食品安全監督官 1 名）

研修監理員：2 名　福原康太・村地ダニッチ

（３）企画・実施担当(講師含む)

本学教員 9 名：石垣和子、武山雅志、長谷川昇、中道淳子、塚田久恵、織田初江、阿部智恵子、金子紀子

視察施設先 9 ヶ所：担当者名　菊池修一、大居勝弘（石川県庁健康福祉部）、長基明子、薬師幸子（コメヤ薬局）、小林淳二、石垣靖人、神戸晃男、西島大輔（金沢医科大学病院）、谷卓、(公立松任石川中央病院)、橋本宏樹（公立つるぎ病院吉野谷診療所）、沼田直子、北西陽一、梶恵子、湯谷幹恵（石川県南加賀保健福祉センター）、南芳美（能美市健康福祉センター）、田畑正司（石川県予防医学協会）、倉本早苗、堅田勉（石川県保健環境センター）

事務局：地域ケア総合センター　竹田昌代、総務課　宮川泰生

４．研修内容

研修の全体概念図は図１、研修日程は表1に示すとおりである。

図1　平成30年JICAカンボジア青年研修　全体概念図

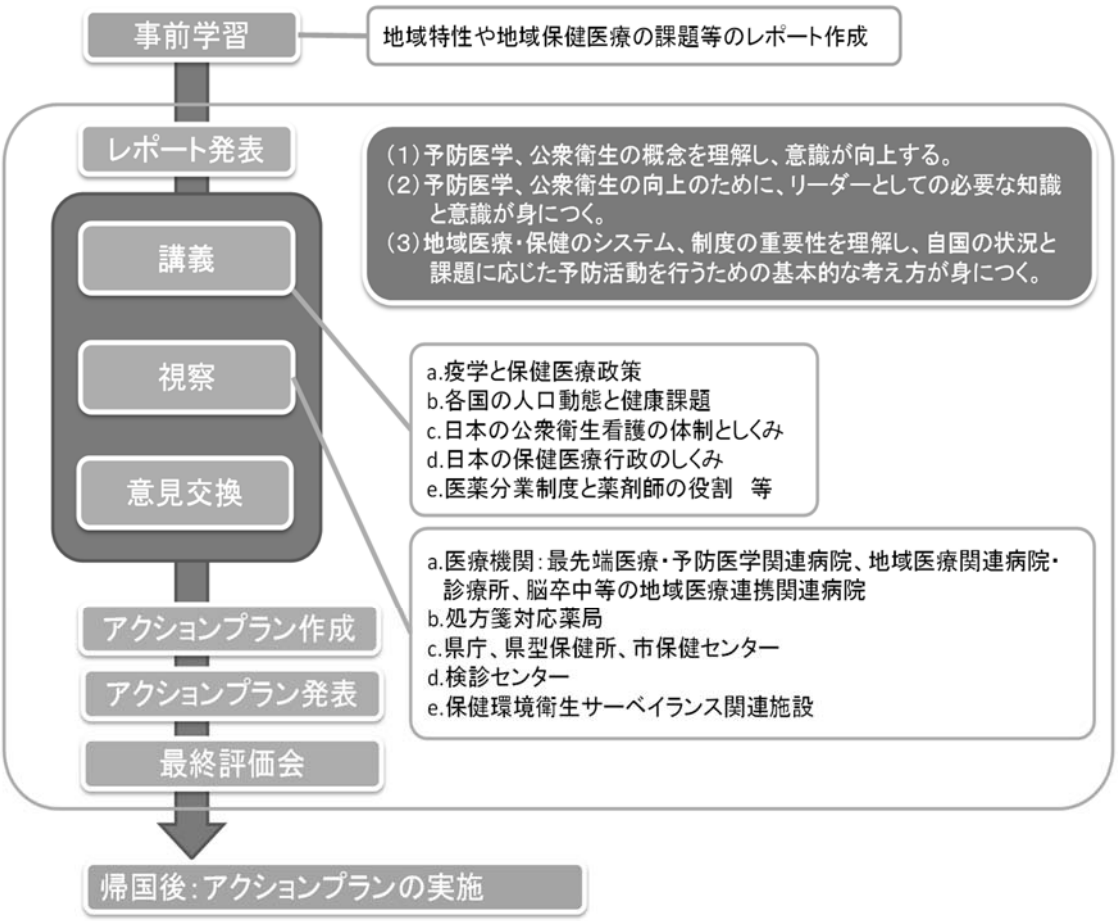

表1　平成30年JICAカンボジア青年研修「地域保健医療実施管理」日程表

月	日	曜日	午前		午後	
11	29	木	9:10～9:30 学長表敬訪問 9:30～10:30 オリエンテーション 10:45～11:15 開講式	11:30～12:45 歓迎会(昼食兼)	13:30～15:30 ジョブレポート発表 15:30～16:30 大学内の案内	
	30	金	9:00～10:30【講義】(武山) 石川県立看護大学における人材育成	10:40-12:10【講義】(長谷川) 医薬分業制度と薬剤師の役割	13:30 -15:00【講義】(塚田・金子) 日本の公衆衛生看護の体制としくみ	15:15-16:30【討議】 ディスカッション
12	1	土	自主研修			
	2	日	自主研修			
	3	月	9:00-12:00【講義】(織田) 疫学と保健医療政策		14:00-16:30【講義・視察】(金沢医科大学病院) 最先端医療と予防医学(三次医療)の実際	
	4	火	9:30-11:30【講義】(石川県健康福祉部) 日本の保健医療行政のしくみと医療保険制度について		14:00-16:00【講義・視察】(石川県予防医学協会) 健診センターの役割と業務	
	5	水	9:30-11:30【講義・視察】(石川県南加賀保健福祉センター) 公衆衛生活動の実際 ①保健所の役割と業務		13:30-15:30【講義・視察】(能美市健康福祉センター「サンテ」) 公衆衛生活動の実際 ②市町保健センターの役割と業務	
	6	木	9:30-11:30【講義・視察】(石川県保健環境センター) 保健環境サーベイランスの実際		14:00-16:00【講義・視察】(コメヤ薬局:視察場所吉野谷) 医薬分業の実際	
	7	金	9:30-12:00【講義・視察】(公立松任石川中央病院) 地域医療(二次医療)と地域医療連携(循環器・脳卒中等)の実際		14:00-16:00【講義・視察】(公立つるぎ病院吉野谷診療所) 地域医療(一次医療)の実際	
	8	土	自主研修			
	9	日	自主研修			
	10	月	9:00～10:30【交流会】(母性看護) 出産前後のケアについての情報交換	10:30-16:00【講義・演習】 全体振り返り、レポート作成		
	11	火	9:00～11:00 アクションプラン発表	11:00-11:30 閉講式	11:45～12:45 JICA評価会 13:00～14:00 送別会	

5．研修評価

本研修の企画は、将来のリーダーとしての予防医学・公衆衛生分野における実施体制の課題解決を担う青年層の知識と意識の向上を目指す前年度のプログラムを継承する形で、予防、公衆衛生、地域医療、地域医療連携をキーワードとした関連施設の視察と講義を入れたプログラムであった。

ジョブレポート及びカントリーレポートなどからカンボジアの国内の健康課題として、妊産婦死亡率の高さ、感染症対策、高齢化に伴う介護の問題、生活習慣病の増加などがあげられ、

その課題に取り組んでいくために、日本の助産・妊産婦保健指導、高齢化対策、医療体制や予防医学、衛生管理の現状を知ってもらうことは、本研修の目的と合致するものであった。

今年度は、産婦人科医師や助産師の研修員が多かったため、助産および母子や妊産婦指導についての関心が高かった。そのため、研修先の産科病棟視察や日本の助産師(本学母性看護教員)および院生との交流会を持った。このことにより、日本の助産における現状や日本の母子保健の状況について学びが深まったと考えられた。

多くの研修生から、公衆衛生活動の実態、感染症、がんの予防対策、地域医療と地域医療連携、日本の保健医療行政体制の仕組みと医療保険制度が参考になったという意見があった。その理由としては、自国の公衆衛生の改善に共有できる、自国では、保健医療において感染症予防が急務なので、多くの知見が得られたということであった。また、市町保健センターの健診や保健医療の役割業務は参考になったとの意見も多かった。

講義・視察とも、熱心に質問され、自国の代表として研修に参加しているという自覚が感じられた。視察先の職員の皆様からは、研修員たちの積極的な学ぶ姿勢と礼儀正しさに,好感を得られていた。

アクションプランにおいては、一人一人の研修生が、今回の学びをうまく取り入れ、帰国後に自国で研修生自身が実施可能な具体的な計画が立案されていた。

文化交流として本学茶道サークルでのお茶会の体験、カントリーレポート発表会、大学案内、送別会時に学部生と交流する機会を持ち喜ばれた。

今回の研修員は、次世代の予防医学・公衆衛生分野における実施体制の課題解決を担う地域や国のリーダー的存在として、アクションプランで発表した計画をもとに活動を行うことが期待される。

JICA が実施した研修員からの評価の中から、本学の研修に関する項目については次頁のとおりである。

写真 1　閉講式での研修生との記念撮影

《研修員からの評価》

1. あなたもしくは所属機関が案件目標を達成する上で、プログラムのデザインは適切だと思いますか

←適切である		適切ではない→		
点数	4	3	2	1
人数	１２	２		

2. 研修期間は適切でしたか

点数	長い	適切	短い
人数		１３	1

3. 本研修の参加人数は適切でしたか

点数	多い	適切	少ない
人数		１４	

4. 本研修において研修参加者の経験から学ぶことができましたか

←できた		できなかった→		
点数	4	3	2	1
人数	１２	２		

5. 視察や実習など直接的な経験を得る機会が十分ありましたか

←十分あった		なかった→		
点数	4	3	2	1
人数	9	4	1	

6. 討議やワークショップなど、主体的に参加する機会が十分ありましたか。

←十分あった		なかった→		
点数	4	3	2	1
人数	7	7		

7. 講義の質は高く、理解しやすかったですか

←良かった		不十分だった→		
点数	4	3	2	1
人数	１１	２	1	

8. テキストや研修教材は満足するものでしたか

←満足した		満足していない→		
点数	4	3	2	1
人数	１３	1		

9. 本研修で得た日本の知識・経験は役立つと思いますか

A：はい、直接的に活用することができる
B：直接的に活用することはできないが、業務に応用できる
C：直接的に活用、応用することはできないが、自分自身のためになる
D：いいえ、全く役立たない

点数	A	B	C	D
人数	1	8	5	

４　そ　　の　　他

４－１　かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み

1.　平成 30 年度の取り組みについて

平成 22 年 10 月に石川県立看護大学とかほく市が包括的連携協定を締結し、本格的な活動を開始して 7 年目を迎えた。

本年度は石川県立看護大学が幹事となり、２回の協議会を開催した。

6 月 8 日（金）第１回協議会：平成 29 年度の事業実績報告と平成 30 年度事業案について

11 月 21 日（水）第２回協議会：平成 30 年度事業の進捗状況報告と平成 31 年度の計画立案について

かほく市から継続 9 事業、新規 11 事業、石川県立看護大学より継続 3 事業を提案し実施された。

	かほく市主催事業	看護大主催事業	看護大担当
1	かほく市ケーブルテレビ事業（企画情報課）		木森准教授
2	健康ブランド化事業（健康福祉課）		武山教授 垣花准教授
3	発達障害に関する相談事業（健康福祉課）		武山教授 大江助教
4	いきいきシニア活動推進事業（長寿介護課）		金谷講師
5	地域支援事業（長寿介護課）		川島教授
6	介護予防サポーター養成講座（長寿介護課）		
7	家庭介護者教室（長寿介護課）		
8	かほく市体力テスト(生涯学習課)		長谷川教授
9	問題を抱える子ども等の自立支援事業(学校教育課)		武山教授
10	教育相談事業(学校教育課)		武山教授
11	妊娠期から切れ目のない育児支援事業（子育て支援課）		西村教授 米田准教授
12	まちかど交流館活性化(産業振興課)		川島教授
13		高齢者と看護学生との交流事業	塚田准教授
14		子育て支援学生ボランティア活動	林准教授 金谷講師
15		災害につよい街づくりフォーラム	武山教授

新規事業である「発達障害に関する相談事業」について述べる。

「発達障害に関する相談事業」は、障害者相談支援センターの平成 30 年 10 月開設に合わせ形で始めた茶話会である。対象は発達障害かもしれないと受診できずに悩んでいる方や発達障害児をもつ保護者である。平成 30 年 12 月から月１回、勉強会も兼ねた形で行っている。回を重ねるごとに参加者が打ち解けて話しやすい雰囲気であり、参加者の悩みを学習会につなげていく広がりが見られている。

2.　令和元年度に向けての事業実施についての検討

平成 30 年 11 月に「いきいきステーション」がいきいきシニア世代の活動拠点として開設された。令和元年度はその「いきいきステーション」を会場として活用させていただけたらと考えている。具体的には看護大学教員の知見をかほく市民に広く還元する場として地域公開講座を企画している。

教員の研究テーマと地域における関係機関のニーズをさまざまな形でマッチングできるように工夫を進めていきたいと考えている。

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事 業 報 告 書（第１６巻）

令和元年10月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター
〒929-1210
石川県かほく市学園台１丁目１番地
Tel.076-281-8308　　Fax.076-281-8309

Ⓒ 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

版権は石川県公立大学法人に帰属する。

印刷用の紙にリサイクルできます。